

「まちづくり」をキーワードに人をつなぐ ～大宇陀まちおこしの会（奈良県宇陀市大宇陀区）～

いにしえ
古より交通の要衝、商業のまちとして栄えてきた宇陀松山地区。通りには江戸時代からの寺院や町家などが数多く軒を並べる。まちのなかでは、宇陀の歴史・文化・自然を守り育てようといくつものまちづくり団体が活動している。これらのまちづくりを団体ネットワーク化することでさらにパワーアップを図ろうと、3年前に「大宇陀まちおこしの会」が立ち上げられた。

今回は、古い町並みを守りながら地域の活性化をめざす宇陀松山地区の取り組みを紹介する。

交易の中心地として繁栄したまち・宇陀松山

ひむかし かきろひ
「東の野に炎の立つ見えて
かへり見すれば月傾きぬ」
柿本人麻呂

この歌は、持統6年（692年）の冬、かるのみこ（のちの文武天皇）が「阿騎野」に狩猟に訪れた時に同行した柿本人麻呂が詠んだとされる、万葉集でも秀歌の一つ。「阿騎野」とは、現在の宇陀地方のことである。

奈良県北東部に位置する宇陀地方は、古代には「阿騎野」と呼ばれ、宮廷のくすりがりの地とされた場所である。「日本書紀」にも、推古19年（611年）の5月5日に菟田野で薬猟が行われたと記録されており、宇陀地方は由緒ある歴史の地である。



阿騎野人麻呂公園に建つ柿本人麻呂像（左）と
かきろひの丘万葉公園の歌碑（右）

いにしえ
また、古より交通の要衝であり、政治経済の中心地として栄えてきた。松山地区は戦国時代に「宇陀三将」のひとりとして称された秋山氏の本拠地、秋山城の城下町として始まった。天正13年（1585年）に秋山氏が追放された後、豊臣家配下の大名

によって城の大改修と城下町の拡大整備が行われ、町名も阿貴町から松山町へと変わった。現在の松山地区は、このときの城下町の町割りを骨格としている。

げんな
元和元年（1615年）に城が破却され、宇陀松山藩となってから織田家の支配となるが、元禄7年（1694年）に織田氏は国替えとなり松山町は以後幕府領となった。織田氏時代には約400軒の商家でにぎわっていた。織田氏が転封された際、織田に関係する施設はすべて取り壊されたため、町人町だけが残った。

当時の松山は、奥宇陀・吉野・伊勢方面と奈良盆地を結ぶ交易の中心地であり、平坦部からは米や塩、その他の日常物資、山間部からは薪炭や木材、特産品の吉野葛・宇陀紙、また遠くは熊野から鯖などの中継地として栄えた。まちには薬問屋や紙問屋をはじめとした商家などが軒を連ね、「宇陀千軒」と呼ばれた。



上空からみた宇陀松山地区

「吉野でできて宇陀紙、宇陀でできて吉野葛」

宇陀紙はコウゾを原料に、吉野でしか採取できない白土を混入して漉いた紙。表装に用いたとき粘りがあり、狂いが生じないのが特徴で、木灰煮宇陀紙は国宝修理用として使用される高級紙である。しかし、現在宇陀紙は宇陀では作られていない。

もともと吉野では今の下市（下市町）と国栖（吉野町）あたりで手漉き和紙が盛んに作られていた。国栖で作られていた紙が国栖紙として古くから知られていたが、江戸時代に宇陀の商人が全国的に売りさばっていたため、すっかり宇陀紙と名づけられ、今なおその名前で表装裏打ち紙として重宝がられている。

一方、吉野葛は、吉野大峰山において修行する山伏たちが、自給自足の糧として葛の根を掘りその葛根を精製した澱粉を、諸国から来た修験者や参拝者らによって各地に持ち帰られたのが吉野葛の始まりと言われるが、実はその本場は吉野ではなくて宇陀である。

タイトルの例えは、宇陀商人らが他産地のブランド商品（国栖紙）を自分の土地のブランド（宇陀紙）として売るだけでなく、他産地のブランド商品（吉野葛）を自分の土地で作って売っていたことを表しており、宇陀松山地区がいかに繁栄していたかを示すものとして興味深い。

重要伝統的建造物群保存地区に選定される

明治時代に入ってからには宇陀郡役所や裁判所が置かれ、宇陀地方の政治・経済の中心地として栄えてきた。まちには、料理旅館や商店が軒を連ね、昭和40年代頃まで活発な経済活動が営まれていた。

現在も、宇陀松山地区には江戸時代から明治・大正期までの町家や寺院などが数多く残っており、まちを訪れた人は江戸時代か明治時代のまちにタイムスリップしたかのような感覚を覚える。



宇陀松山地区の眺め／下にみえるのは森野旧薬園（国指定史跡）の吉野葛晒し工場の一部

薬の館／アステラス製薬（旧藤沢薬品）の創始者の母の生家



松山地区の玄関口／国指定史跡の松山西口関門（黒門）

大宇陀観光の拠点・道の駅「宇陀路大宇陀」



このように、松山地区は各時代の歴史と文化、さらには自然環境が重層的に堆積しており、きわめて貴重な文化遺産を継承している。2006年7月には国の重要伝統的建造物群保存地区（*）に選定されており、松山西口関門をはじめ、200件を超える建築物や工作物などが保存対象となっている。

重要伝統的建造物群保存地区（*）とは

文化財保護法第144条に基づき、市町村が条例等により決定した「伝統的建造物群保存地区」のうち、特に価値が高いものとして国（文部科学大臣）が選定したものを指す。2008年6月現在、全国で83地区が選定されている。奈良県内では、松山地区のほか橿原市の今井町が1993年に選定されている。

まちづくりの取り組み

重要伝統的建造物群保存地区に選定された松山地区は、面積約 17 ha、南北約 1,470m、東西約 340mと南北に細長い形をしたまち。このまちなかに約 400 棟の町家などが軒を連ねる。

大宇陀のまちづくりをたどってみると、まちなかにいくつものまちづくり関連のグループや事業が立ち上がっているのがわかる。そのいくつかを紹介してみよう。

■「かぎろひを観る会」

まず、まちづくりの先駆けとなったのは、1972年観光協会の主催で始められた「かぎろひを観る会」である。1988年に商工会青年部が「かぎろひ」をテーマにイベント参加し全国的に知られるようになった地域活性化のイベントである。「観る会」は冒頭に掲げた、柿本人麻呂の歌に出てくる「かぎろひ」を観ようと、旧暦の 11 月 17 日に松山地区から少し離れた「かぎろひの丘 万葉公園」で開かれる。昨年 12 月 14 日に行われた「観る会」で 37 回目を数える。

「かぎろひ」は、厳冬によく晴れた夜明けに現れる太陽光線のスペクトル現象で、参加者はこれを観るため早朝の午前 4 時に集まり、たき火を囲みながら日の出を待つ。葛湯やてんやく茶などが振る舞われ、朝市もある。今では大宇陀を代表するイベントとなっている。

■宇陀松山夢街道

96 年夏からは、まちなかにある古い町家や



ライトアップされた松山西口関門（左）と地元住民・小学生らによる手づくり灯火作品（上）

「松山西口関門」など伝統的建造物をライトアップする「宇陀松山夢街道」が行われている。民家の玄関先や路地には約 700 個の竹灯ろうの他地元住民や小学生がつくった手づくり灯火作品も並び、模擬店やミニコンサートも行われる。

■宇陀まちなみ研究会

2001 年には、左官、材木、建設、造園、電気など建築関連の仕事に携わっているまちなかの若手 6 人が集まって「宇陀まちなみ研究会」が結成された。同研究会では、建築や古民家に関する勉強会を開催したり、地区内事業の町家、公園などの再生プランを企画・立案するといった「町家の再生と利活用」や、解体前の町家の記録を保存したり、現場で気づいた昔の智慧をストックするなど「伝統技術の継承と蓄積」にも取り組んでいる。

■茶呑みばなしの会

04 年からは地区内の年配の人たちが、月 1 回（7 月・10 月を除く）、宇陀松山の情報発信基地「千軒舎」に集まって松山での暮らしにまつわる思い出ばなしなどをおこなう「茶呑みばなしの会」を続けている。同会には松山の歴史愛好家やまちづくりに関心を持つ市外の人も訪れるという。

■宇陀かわびとの会

05 年には、20 代～70 代の大人が集まって「宇陀かわびとの会」を設立している。川遊びの楽しさや自然の大切さを次の世代に伝承するとともに、多様な生物が共生する川づくりを実践するため、行政にも加わってもらい、美しい川、遊び場としての川を守り、人の意識を川へ向ける活動を行っている。

「まちづくり」をキーワードにつながる

宇陀松山地区では、このように、いくつものまちづくり団体が立ち上がっている。それぞれのまちづくり団体は、歴史のある松山のまちを後世にまで残していきたいという地区住民の心意気の表れでもある。しかしながら、それぞれが個別に活動しては大きな力になるのは難しい。まちづ

くり団体をつなぎ、地域の情報発信力、行動力を高めることが必要となってきた。

そこで、06年6月に立ち上げられたのが「大宇陀まちおこしの会」である。区域内での動植物の研究や町並みのライトアップ、薪能の保存など個々に活動する団体のネットワーク化を進め、いろんな立場でまちづくりを考える場の提供をめざしている。

同会は、発足以来、地域の伝統や景観の保存・活用、地域のPRを行ってきた。また、全国的な町並みの勉強会である「全国町並みゼミ」に参加したり、全国各地のまちづくり団体の視察を受け入れたりしながら、地域交流にも取り組んできた。

「まちおこしの会」では、町並みを生かしたまちづくりが結ぶ縁を大切にする。06年7月に、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されたことで、松山地区の人たちのまちづくりに対する気運が高まったという。これまで接点のなかった人々が「まちづくり」をキーワードに、出会い、つながるようになった。「まちおこしの会」がそれをサポートすることで、町内会の人たちがつながり、それが地域、県境をも越えて人がつながるようになった。

また、「まちおこしの会」では、外部の人たちのまちに対する目もまちづくりには欠かせないとみる。学識者や来訪者などからの賞賛が住民に自分たちのまちの良さ・素晴らしさを気づかせるきっかけになる。まちにしがらみのない外部の人がまちに移住しまちづくり活動に参加することでも、まちの人のヤル気が高められ、自発的な運動を興



していくことにつながるという。

宇陀市のまちづくり拠点の松山地区まちづくりセンター「千軒舎」で働く、森本陽子さんも外部からやって来た一人だ。岡山県倉敷市の出身だが、町並み保存事業推進のため大宇陀町（当時）に就職し、住民としても地区内の古民家で暮らす。「宇陀松山は歴史建造物の宝庫、そのうえ室生や吉野などの歴史遺産にも近く、こんなところは滅多にない」と目を輝かせる。



元歯科医院兼薬屋を再生活用しているまちづくりセンター「千軒舎」

また、「まちおこしの会」事務局長の裏宗久さんは、「宇陀松山の魅力は『^{さと}僅び（田舎びていること）』の魅力。松山地区の自然、歴史、景観だけでなく、まちに住む人を理解してまちを好きになってくれる人を増やしたい」という。

松山地区のある大宇陀区（旧大宇陀町）の人口は昭和20年代後半から一貫して減り続け、現在8千人あまり。まちの活性化のためには、交流人口増加は避けて通れない。

しかし、裏さんは「松山のまちは観光バスで大学して押しかけるまちではない。少数でもいいから、まちの魅力をわかってもらえる人に来てもらいたい」と、安易な入込観光客増加路線には与しない。

山あいのまち・松山地区では、ひっそりとしたまちのたたずまいのおかげで地道だがしっかりとしたまちづくりが進んでいる。（井阪、山城）